



ピノコパパのエッセ
イ集から



讃岐の五街道と
象頭山

pinokopapa

五街道

単に五街道というと、東海道、中仙道、日光道中、などの江戸幕府が開いた街道のことです。それに倣ってか、讃岐にも五街道が開かれておりました。讃岐五街道といわれ、志度街道、長尾街道、仏生山街道、丸亀街道、金比羅街道がそれです。ところがさきの伊予街道、土佐街道、阿波街道はここにありません。この三つの街道は実は香川県内だけでなく、それぞれ愛媛、高知、徳島県内の金比羅を目指す道中もそう呼ばれておりました。ここが大事なところですよ。金比羅信仰は大隆盛を誇り、すべての道は金比羅に通じるとさえ言われたこともあった時期がありました。それゆえ、高知から金比羅へ向かうのが土佐街道、愛媛からは伊予街道であったわけです。同様に、阿波街道は徳島から三頭峠を越えて金比羅に向かいます。この道は阿讃山脈（四国山脈）を越えます。相当な急峻で、山も高く、大変な道中であったことは容易に察しがつきます。それでも人々は押し寄せました。お伊勢参りと金比羅参りは特別で、江戸中期からほぼ自由だったからです。人々はそれぞれ気ままに旅なんかできない時代でありました。しかし、この二つは許されていたのです。東海道中膝栗毛は、お伊勢参りのガイドブックでありました。ですから、京大阪見物が主のように書かれた解説もありますが、ちょっと違うと思います。やじさん、きたさんはお伊勢参りのあと、続編で大阪から金比羅へ回っています。そのあと善光寺へも向かいますが、このように物見遊山だけでなく、お参りの旅であったのです。と言うのは言い訳で、本当はこっちの物見遊山が目的だったことは言わずもがなのことですが。

さて、伊予街道、土佐街道のほかに丸亀街道、高松街道、金比羅街道の五街道を金比羅五街道といいます。讃岐五街道と重なったものもあります。しかし伊予、土佐街道は讃岐五街道と違って、金比羅へのみ向かいます。もちろん道はつながっていて、高松へもゆけます。

江戸の五街道の起点は日本橋でした。讃岐五街道の起点は常盤橋です。現在、この常盤橋は、栗林公園の東門入り口に架かっています。元からここにあったのではなく、移設されてきました。この常盤橋は、現在の三越、丸亀町ドームあたりにあった高松城の大手門の外堀にかかっておりました。栗林公園に行ってみても、さほど大きな橋ではありません。それは、外堀がさほど幅広くなかったということではなく、元来の常盤橋の一部を使って移築したということなんです。しかし、讃岐の主要街道のすべてがここから始まりました。そんなことから、道は色々な目的をもって作られていることが解ります。奈良、平城京から先ごろ東北へ向かう幅広の、出来る限り直線に作られた道が発見されたというニュースがありました。この道は名古屋あたりを関東に抜け、東北へ向かうと推測されていました。ここを朝廷の軍隊が数列横に並び、行進していったのではないかとわれておられます。道のわきには排水路まで整備されていたそうです。一気に、一直線に、朝廷から派遣された軍隊がここを駆け抜けていったのでした。坂上田村麻呂もここを走ったのでしょうか。そして、常盤橋を起点とする讃岐五街道も、高松城と讃岐藩全土を結ぶ交通の要衝でありました。その常盤橋も、高松城廃城に伴って、1900年、外堀が埋立てられ、それに伴って栗林公園に移築されたのでした。現在、正式名、中央商店街北部三町ド

ーム、通称、丸亀町ドームの下に、この常盤橋が架かっていたことを表示する石碑が新たに立てられています。ちなみに、このドームに象徴される商店街の再活性化モデルが沈滞した商店街の活性化を図る人たちに注目され、よく視察に来ていました。でも、そんなに活性化したとも思えないのですが、どうでしょうか。昔は通りをものすごい数の自転車が走り、それよりも多い数の人が歩いて、危なくてしょうがなかったぐらいの人通りでした。今は、河原町にあった天満屋も撤退してしまい、再度どこかが来て再開しようとはしているみたいな状態です。そういえば、河原町にはダイエイもジャスコもあったのでした。ダイエイは二階が映画館で、六階まで売り場があり、よく行きました。いまは地下だけがレストラン街として1~2軒営業していて、うえはシャッターがおりたままになっています。

讃岐五街道の話が郷土史の話みたいになりました。ついでですから、善通寺に残っている南海道の話をしてしまおう。現在、JR金蔵寺駅の横に細い道が国道11号線に沿うように走っています。そして、それから西に向かう途中に、この南海道の解説を書いた木の看板が立っています。南海道と言う呼称はこれから先は、三重、和歌山あたりから淡路島、徳島、香川、愛媛、高知の国々の集まりのことをいい、ここを通る街道のことも南海道と言いました。大体、飛鳥時代から平安時代、5世紀から7世紀にかけて造営されたようなんですが、善通寺には南海道のほんの一部がほぼ変わらず残っているようです。といえ、なんと退屈な話でしょう。しかし、こんなに古くからの道が、使いづらくて見捨てられてでも、そのまま生き残っているのです。この先は善通寺の弘田町永井と言うところまで伸びて、あとは11号線に交わり、あとはよくわかりません。しかし、奈良時代からのこの道を、租庸調が運ばれて行ったのでした。租は主に米であり、庸は都での労役、調は調布とも言われ、布製品であったのでしたが、庸は布製品、粟、米でかわりとするのができ、これらが中央政府の収入にもなっていたようです。しかし、奈良の大仏さんは、これらの人たちの苦役で作られたのでした。さらに、善通寺弘田町の先の三野町から、沢山の瓦が焼かれて運ばれたそうです。三野町では、山の斜面を利用しての、瓦を焼いた大きな登り窯がいくつか発見されており、その周辺に残された瓦の破片が都の瓦と一致したので、このことが立証されました。奈良のお寺の屋根の瓦は、その大半がこの南海道を通っていったのでした。そういえば、今は廃れて無くなってしまいそうになっていますが、鬼瓦を作る所が何軒もありました。また、善通寺、丸亀、観音寺にも中規模の瓦製作所が今でも操業しています。

讃岐五街道と金比羅街道という讃岐の主要街道、それから古代の道を歩くと、それが今の自分につながっているとは到底思えなくて不思議な気がします。この善通寺には他に遍路道の道標があちこちに立っています。そんな道を歩くと、つい往事のことを思うようになります。讃岐は平和でした。大きな戦火と言えば、唯一高知の長曾我部が制覇に乗り出してきた時だけでしょう。仁尾町と白鳥町に悲惨な言い伝えが残っています。それでも日本史の中では英雄です。あの過酷な上士制度を幕末まで引き摺らせた山内一豊も歴史の上に名を残しました。思えば皆そうです。

四国は奈良時代から四つの国に分かれてあり続けました。五畿七道の南海道という行政区分の内の令制国として、讃岐国、阿波国、伊予国、土佐国に区分けされていました。それが大きく揺らいだのが明治維新の廃藩置県の時でした。そんなことはどこの地方にでもあったことです。幕末に豊浜あたりで、尊王攘夷か幕府に加担するかで5～6人の藩士が切り合って、2人だったかが亡くなったという事件がありました。それだからといって明治に政府から排斥されたかという、嵐が頭の上を過ぎてゆくのを、首をすくめてやり過ごすという巧みな処世術で対処したようです。淡路の淡路徳島藩が北海道に追いやられ、会津藩の人たちと同じ開拓の過酷な運命に翻弄されたこととは大違いでした。

ついでですから、私が昔から気になってたことを書かせていただきます。五畿7道は奈良時代からの事で、古事記にあってはイザナギ、イザナミの命は日本を生み出すのにあたって、先ず淡路島を生み、次に四国を生みます。

この島は身一つにして面四つあり

と語り、

伊予の国は愛比売

讃岐の国は飯依比古

阿波の国は大宣都比売

土佐の国は健依別

と呼んでおります。伊予の国の愛比売は えひめ 、讃岐の国の飯依比古は いいよりひこ、阿波の国の大宣都比売は おおつけつひめ 、土佐の国の健依別は たけよりわけ と読みます。

四国は古事記の時代から四つの国があったことになります。その国の名前も上記の通り。しかし、そもそも四国は何故二番目に生み出されたのでしょうか。そして讃岐のいいよりひこは、米を作る男、愛媛はそのまま可愛い女神、阿波は産物が豊富な、食物を司る女神、土佐は猛々しい男という意味のようです。古事記の記述で早やこのような個性を持った国と四国を記して

いるのは何故なのでしょう。そして、四国の各県の性格は今もこの通りで、言い当てているのも不思議です。

このような疑問を持ち始めると、まるで古事記の解釈の森に踏み込むようで、手が引っ込んでしまいます。しかし、それでも四国は昔からこうも認識されていたと、すこし誇らしく思うのは児戯に等しいでしょうか。淡路島の伊弉諾神社に参った時、そんなことをまた思い出してました。

実は、金比羅さんって今は神社ですが、ついこの前まで真言宗のお寺でした。嘘のような話ですが、本当です。明治維新の前は象頭山松尾寺金光院に祭られた金比羅大権現でありました。権現の名の通り、これは神仏習合によるもので、仏が仮に神の姿で現れた金比羅大権現さまでありました。

では、祭られている神様はどなたかと言うと、大物主命で、これは誰かと言うと大国主命なんです。このあたり、実はとても複雑な事情が神様にもありまして、大国主さんが国を治めるのに悩みぬいていると、海の向こうから神様が現れ、大国主さんがあなたは誰ですかと問うと、私はあなたの魂ですと答えました。なんとも複雑なのですが、大国主さんはそこで自分の和魂を祭りました。これが大物主さんです。ところが、この大物主さんは蛇神さんで、水神、雷神で、豊作、厄除け、酒つくりの神様でもありました。当然、大国主さんの分神ですから、縁結びの方もお手の物と言いたいのですが、こっちは縁切りの方を受け持っています。また、大変強いかみさまなので、祟りの方も強いんです。それで、大黒天さんとして祭られることもあるみたいです。大黒天さんは宇宙の闇の力を司っていますから、本当は怖い神さんなんです。

さらに、もう一柱、祭神がおられます。どなただと思われませんか。崇徳天皇さまです。崇徳天皇さまは、この讃岐に流されてこられた時、象頭山松尾寺金光院に参籠になられ、のちにこの讃岐で崩御されました。それゆえ修験道の慣わしから金光院に合祀されました。崇徳天皇さまはこちらに縁が深かったのか、退位後は、讃岐院とも呼ばれております。しかし、大きな声ではいえませんが、この方も日本一の崇神で在らせられるので、ゆめゆめ、気楽にお願いごとなどせぬ方が、身のためかもしれませんよ。と、脅したところで、金比羅宮にはもう一つ来歴がございます。

その、もう一つの来歴を形作る役者が、役小角さんです。先ほども松尾寺と修験道とに触れましたが、この修験道の開祖、役小角さんが象頭山に登られたとき、松尾寺の金比羅さんの神験に出会って、これが開山の縁起になったと伝えられております。

しかし、金比羅は1368段の石段を登るだけで、霊験あらたかです。初詣では、小豆粥がふるまわれます。それに、書ききれないほどの謎があります。ぜひ、健康のために石段をお登

り下さい。

昔からの善通寺の町の道筋は変わったりしてません。一本、本郷通りの北に、庄内線と呼びならわしてきた道が、昔増えました。そういえばそれにつながる道も出来たんです。しかし、変わっちゃいません。変わりようのない町です。

その本郷通ですが、これは、善通寺の西門を赤門、そこへ続く道を本郷通と新しく呼ぶことにして、新將軍を歓迎したことの名残りです。とくに、中通は今のようになっすぐ伸びていたのではなく、本郷通から斜めに走り、途中から他と並行して走るようになっておりました。これを第11師団が来ることになり、新しく直したのでした。

今の善通寺駅から先に、広い野原に兵舎と訓練のための練兵場がそれぞれに作られていたことは以前紹介しました。ですから、普通の民家、商家はこの片原町より北、中央小学校辺りからあったようです。特に、赤門筋が主な商店街でした。

その道筋に小さな神社が点在しています。日頃見てはいても、それがどんな神社か、関心がなくて知りませんでした。町々の神社は栄えた町衆がそれぞれこぞって建てたもんでした。ですから町の端に立ってたりします。

そんな中で、鎌倉神社は町衆が建てたものではなくて、相当昔からあったもののようです。ついこの前、由来を書いた看板を読んで、びっくりしました。

鎌倉神社の由来（社殿由来書き写す）

前九年の役に続いて、一〇八三年（永保三年）より八七年（寛治元年）に奥羽の清原家衡・武衡とその一族の真衡との間に戦乱が起こり、朝廷では、陸奥守八幡太郎源義家に平定させた。

これが俗に云う後三年の役である。

後三年の役に義家の臣、鎌倉権五郎影政は、金沢柵の攻防戦で戦に右眼を射たれながら、その敵を射殺し三浦為嗣が影政の面を踏んで矢を抜こうとすると、その無礼を怒って自分で目玉諸共引き抜いたと云う豪の者であった。

生没不詳。

時代は降って、南北朝時代に至り、一三六二年（正平十七年）七月南朝方に帰順した。

細川清氏討伐に向かった細川頼之に従軍し白峰合戦で功績のあった香川氏は、西讃三郎を賜り天霧山に牙城を築き多度津の本台山（桃稜公園）に居館を構え、一五八五年（天正十三年）豊臣

秀吉の、四国征伐迄此の地方を支配し、祖先鎌倉権五郎影政を氏神として此の地に祀った。
当時は、鳥居、参道、本殿と鎌倉町一帯の広大な境内であった。

因みに、市内宮東にも

権五郎さんが祀られ片目の魚が棲んでいると伝えられる。

と、あります。この鎌倉権五郎の逸話は、以前から知ってはおりました。しかしそれがこの香川の地の、ましてや善通寺の関わった話とは思いませんでした。もう千年昔の話です。

実は、讃岐五街道のことを書こうと思った一つの要因がこれでした。伊予街道を川之江に向かって車で行くと、街燈に 梅が枝 大西甘味堂 と、それはそれは小さくて、全く見落とす確率100パーセントの看板が架かっています。そこにあるはずと思って探せば、やっと見つけることができます。私も最初は車で通りながら、横目で見てたので何度も見落としました。そこで、その先の駐車場に無断駐車し、歩いて探しました。そうすることでやっとこの看板を見つけ、車で来なくてよかったと、細い路地をたどって歩いてゆきました。すると、テレビで見た通り、そうです、この梅が枝のことは地方情報番組で見たんです、その番組で紹介されてた通り、ぺったんぺったんと餅をつく音が聞こえてきて、やっと甘味堂に辿り着きました。その店の趣きは、昔のままの木枠にガラスのに入った引き戸の入り口があり、それをあけるとガラスの商品ケースがあって、梅が枝がありました。ほかに、牡丹餅、黄粉餅もあったと思います。梅が枝はボール紙の箱に入って陳列されており、四角く切って包んだものが詰められています。ピンクと緑の色があったと思います。ピンクは梅の花の色、緑は葉の色なのでしょう。四角く切って包んだものを作った後に切り落とした端っこも袋に詰めて置いてあります。こっちは安価です。箱詰めの方はすこし高いです。でも、切り落としのほうが、本当はおいしい。きちんと包まれた梅が枝は、食べ方を知らなければ食べにくいし、味も解りません。どうするかと言えば、透明のフィルムで包まれた四角の梅が枝の横をじいっと見ると、5層積み重なっているのが解ります。これを一枚一枚、破らぬように剥がして食べるのです。層の積み重なりは餅の一層ごとに取り粉がまぶしてあり、剥がそうとすれば剥がせます。薄い、2ミリに足らぬ、伸した伸し餅を五層重ねた餅菓子が、梅が枝です。

梅が枝は、出来立てから数日は一枚ずつ剥がして食べます。砂糖の甘みにニッキを加えた程よい噛みごたえで、和菓子の中ではちょっと変わった味がします。これとそっくりなものが、実はあります。生八つ橋です。しかしです、八つ橋こそ江戸中期から京都で作られ、名前の知られた名物ではあります。ところが、その八つ橋の売れ行きが芳しくなくなってきた、それで考案されたのが生八つ橋でありました。1960年代の事です。しかし、梅が枝は江戸中期から作られていました。そして、大西甘味堂の辺りの街道沿いのみならず、琴平周辺で金比羅参りの名物お土産として売られもし、大いに買われていった郷土名物でありました。逆に言えば、生八つ橋こ

そコピーです、と目くじら立てるほど、今はもう梅が枝は存在感がありません。伊予街道を金比羅参りから歩いて帰る参詣人が、帰る先へのお土産にと買って帰ったものでしたが、人も歩かず、車も通れず、まして金比羅参りに行く人も途切れて、この銘菓も忘れられました。

豊浜の道の駅にはまだ置いてあると思うのですが、見かけたら食べてみてください。食べたこともないのに、つい懐かしいと思ってしまう、そんなお菓子です。

まだ金比羅さんから意識は離れておりません。表題の象頭山は、琴平山とも金比羅山ともいい、大麻山の南東部のことで、その中腹に金比羅宮があります。この象頭山については、

象の目の 笑いかけたり 山桜

と、あの与謝蕪村さん句を作っております。蕪村さんも金比羅参りにきたのです。

善通寺を通る県道三一九号線を琴平へ走ると、大麻山は紺色の山肌を見せ、つながっている象頭山は見えません。しかし、すぐに象の頭が見え始め、善通寺と琴平の間に来ると象の頭の真正面をみるようになり、其れから南をみると、更に琴平山が続いております。これら一連の連なりを大麻山山系と言います。この山系は神領として1200年以上手つかずで置かれていて、原生林がそのままの姿で残っており、人の手で植えられた杉などありません。この山に繁茂している多様な広葉樹がふもとを潤して、豊かにしております。台風だって屏風のように遮ってくれます。大麻山を登ると、禁猟区ですから雉にも巡り合うことがあります。ひょっとしたら猪にもあうかもしれません。

しかし、今はその頂上に大きなテレビアンテナが5本、立っています。私は毎朝、犬の散歩の際、大麻山とテレビアンテナを睨みつけます。自分の目の調子を知るためです。あのテレビアンテナの下には幅広いアスファルトの道が東にだらだらと下っており、その降り切ったところが象の頭辺りになります。そこを右に行くと竜王神社、左に行くと金比羅山奥之院になります。そして、この道はもうすぐ桜の咲く春の名所でもあります。

それにしても、なぜここが象頭山なんでしょうか。象の頭に似てるから、ということですが、誰が象の頭に似てると言ったのでしょうか。昔々のことですから、象を見たことのある人っていたのでしょうか。

象頭山は、お釈迦様が修行をして、悟りを得た山の事で、須弥山の別称でもあります。インドの事ですから、象の頭というのは理解できます。それに因んでこの山を象頭山といったとして、

こんぴら ふねふね おいけに ほ かけて しゅらしゅしゅしゅ

まわれば しこくは さんしゅう なかのごおり ぞづさん (ぞずざん)

こんぴら だいごんげん

ですから、仏教のえにしと神道の金比羅大御神がどこかでごっちゃになり、しかもお釈迦様の聖地の須弥山の別称を、有難くも、この山の名前にしております。また、形が本当に象の頭通りなんです。標高600何メートルですから、一度見てみてください。登っても大したことはありません。五色台と並ぶ、讃岐の霊山です。五色台も、松平高松藩が開いた霊山です。

